

# カワラノギクについて

河又 猛 (カワラノギクを護る会代表、海老名市)

## 1. カワラノギクとの出会い

横浜植物会発行の年報(1987年第16号)に掲載された、撮影者、永野武司先生のカワラノギクの写真が、私にとって初めての出会いでした。

当時山野草の講師としてお願いしておりました故内田藤吉先生と、その写真を手掛かりに、社家から磯部頭首工の川原まで、1年あまり探し続けました。その間、大勢の方から様々な情報をいただいて、1991年11月に、磯部頭首工の下流、500mほどの所で、半ば褐色に変わった草の陰から、薄い青紫色の花に漸く廻り会うことができました。その素晴らしさに、暫らく身動きができないほどでした。

其のおり内田先生から、カワラノギクの分布や、「この花は、このままでは遠からず絶滅する危険な状況にある」というご説明をいただきました。

私は、即座にこんな美しい花を、なんとしてもこの世から滅ぼしてはならない、出来るかぎりのことを尽くしてみようと、思いました。

内田先生のご了解をいただいて、1花分の種子を持ち帰り自宅で試作した結果、予想外の成績が得られました。

尚、この自生地から500mほど下流で、カヤや、センダングサの繁る台地にも、400本ぐらいのカワラノギクが、数本ほどの個体群になって、広い範囲に点在しておりました。

この場所に、毎年200箇所ずつ、3年のあいだ、播種を続けました。その場所に目印をつけて確認した結果、平均12箇所の発芽を確認できましたが、ロゼットのまま、越年することなく、枯死してしまいました。

夏に、1週間ぐらいの干天が続くと、春に発芽したロゼット苗は、総べて枯れてしまいました。

ここのカワラノギクも、1995年には100本ほどに激減し、1997年には、すべて消滅してしまいました。この台地は、水面から7mぐらい高く、乾燥が激しいためと、思います。灌水を試みましたが、急斜面のため、継続できませんでした。

この右岸一帯のカワラノギクは、すでに消滅したところで、ダム放流には関係ありませんでした。



## 2. 磯部頭首工下流の左岸に就いて

1992年10月、磯部頭首工下流700mぐらいの左岸一带に、メドハギや、センダングサ、シナダレスズメガヤなどが繁茂する中に、12本のカワラノギクが自生しておりました。この種子をその場に取り播きを続けましたので、1997年8月には、1280本になりました。

同年、相模川総合整備事務所により、磯部頭首工左岸の魚道改修工事が行われることになり、カワラノギクの自生地がちょうど工事区域に懸かりましたが、同所の計らいで、自生地を総べて保全していただくことができました。



1998年3月、永野武司先生の計らいで「カワラノギクを護る会」が結成され、会員の努力が実り、1998年7月には一気に5000本ほどのロゼット苗が生育するまでに回復してまいりました。

その他、開花見込み株も300本ほどが成長をしており、今後に充分期待できる状況になっておりました。

然し、この魚道工事完了直後から流れが変わり、8月28日の最初のダム放流で、開花見込み株40本を残し、流されてしまいました。続けて城山ダムからの放

流が1ヶ月ほど繰り返されたために、5000本ほどのロゼット苗も開花見込み株も、跡形もなく流失してしまいました。

## 3. 海老名市上郷地先の情況

1994年7月、横須賀水道の水管橋下の左岸に、神奈川県内広域水道企業団と海老名市役所に勤務しておられる有志の方々のご協力で、約500㎡の試作場が完成しました。

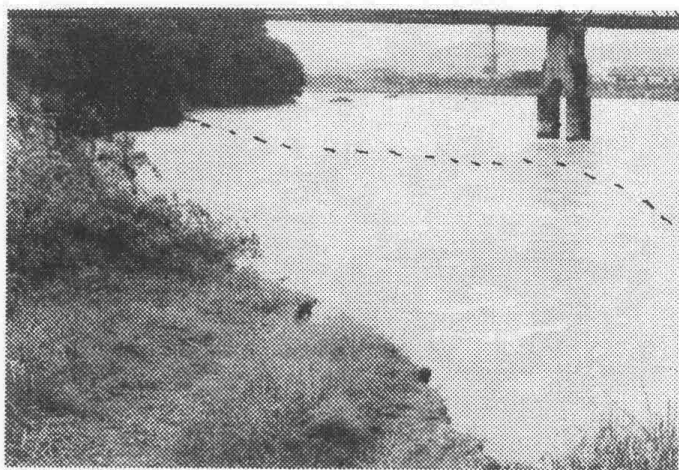
この試作場に、自生種37本と、海老名体育館下のロゼット苗498本を移植しました。

1996年には、この試作場で、1000本ほどのカワラノギクが開花しました。ここで採取した種子は、同所右岸の川原に播種しました。

また、この試作場の種子が飛んだものと思われるが、少し離れた川岸の斜面に、1998年7月には、約500本のロゼット苗と、開花株280本が生育しておりました。

その他、この上流200mぐらいの場所に、カワラサイコが自生しておりましたが、足元が洗掘されて、その崖崩れとともに流失しておりましたので、この試作場でともに保護しておりました。

この試作場も、ダムの放流によって流失し、現在は川の流れの下になってしまいました。



上郷地先の流失した試作圃場跡  
点線の辺りまで試作圃場があった

#### 4. 横須賀水道の水管橋下の右岸に就いて

横須賀水道水管橋下右岸の、上下流300mぐらいの区間に、1995年、前記左岸で採れた種子と、ロゼット苗200本を移植しました。この後1996年からは毎年この川原に播種と移植を続けましたが、一見適地と思われたのですが、何故か成長も悪く、次第に減少しておりました。

1998年7月、ロゼット苗500本と、開花見込み株260本が成育しておりましたが、前記ダムの放流によって砂利が50cmくらい堆積して全滅となりました。

#### 5. 海老名市体育館下の状況

1991年11月、海老名市体育館下の川原には162本のカワラノギクが繁殖しておりました。この川原は、小田急電鉄の鉄橋から、社家まで2kmぐらいの広い範囲で、シナダレスズメガヤが密生しておりました。

カワラノギクは、鉄橋の下から1kmの範囲に、1本から6本の小さな個体群を作って、合計48本が点々と自生しておりました。少し離れた下流にも、67本の個体群がありました。

また、500mほど離れた相模興業の社有地の中にも、47本が自生しておりました。

この中で、好条件と思われた67本が自生している所を重点に繁殖を進めましたが、ヨシやシナダレスズメガヤなどに被陰されるほか、乾燥で枯死するなど、一進一退を繰り返し、1997年に187本が開花したに留まりました。

1998年7月には、ロゼット苗1500本と、開花見込み株が120本ほどにまで回復してまいりました。

然しこの川原も、前記の日時、ダムの放流によって、ロゼット苗120本を残して全滅状態になりました。

#### 6. カワラノギクの被害状況

場 所	開花見込み株	ロゼット苗
(1) 磯部頭首工下の左岸	300本	5000本
(2) 横須賀水道水管橋下の左岸	280本	500本
(3) 横須賀水道水管橋下の右岸	260本	500本
(4) 海老名市体育館下	180本	1500本
合 計	1020本	7500本

#### おわりに

1998年7月現在で、上記の4箇所、約8,520本のカワラノギクが生育しておりました。順調にゆけば、あとわずかで可成りの状態に回復できるものと、みんなが期待を寄せておりました。

中学2年の女生徒から72歳の主婦の方まで、寒い川風荒ぶ中での種子播きや、炎天下の除

草に灌水、生まれて初めて触れた、重いツルハシを振るっての側溝掘りなど、延べ997時間にも及ぶ不慣れな作業に耐えたのも、やがて咲く花や、それが自然や私たちの生活環境保護を守る大切な行為であるという、深い自覚があったからと思います。

カワラノギクが発生したのが、何時のころか私には判りませんが、かつて相模川が東京湾に注いでいたころから、寒冷期や流路変更、地殻変動、火山の降灰など、今度の雨などより、はるかに激しい環境変化があったと思います。それに耐えて、相模川とともに現在地に辿りついたものと思います。

今後数年のうちには、再び同じような雨が降ることと思います。そのたびに流されていたのでは、2年草のカワラノギクは、生き残ることはできません。

前記猿が島の乾燥した台地の場合のように、多数の自生種が、驚くほどの速さで消滅してしまいました。他の要因もあることと思いますが、カワラノギクには、先ず安定した水分の補給が重要な要素である、と思います。大雨でダムが放流した時以外は、いつも一定した水位を保っている流れでは、川岸寄り以外の河川敷は、乾燥化が進み、カワラノギクの発芽、生育、開花、結実のすべてが阻害されることと思います。

降雨量に従って、流れの水位も増減するようになるならば、カワラノギクの生育も安定するものと思います。それは、たいへん困難な問題であると思いますが、相互に生存できる環境を創る以外に、生き残れる道はありません。相模川流域に住んでいる大勢の人たちの心から、川の意識はとうに消え去ってしまっていると思います。

私たちの掛けがえのない生活の場としての相模川を、四季折々に花が咲き、昆虫も群れ、小鳥が舞え、魚も群れられる、子どもたちの水遊びの歓声がこだまする、何としても、そんな相模川にしたいと思います。

